

東北地区救護施設研究協議大会で研究発表

第一分科会発表を通して

救護施設やしおみ荘 生活支援部課長 永沼憲一



去る六月十一日(水)、十二日(木)の二日間にわたり、宮城県松島町「ホテル一の坊」において、第四十回東北地区救護施設研究協議大会が開催された。

救護施設の役割が多様化する今日、利用者のニーズは、従来のセーフティネットとしてのニーズから中間施設としてのニーズまで多岐に及んでいる。今大会の大きなテーマも、「新しい時代における救護施設の機能強化に向けて」と銘打たれ、今後の新しい救護施設のあり方を模索するものであった。

今回は当やしおみ荘でも第一分科会において、支援の事例の研究発表を行った。第一分科会のテーマは、「救護施設の機能強化の具体化にむけて」というものであったが、やしおみ荘としては、そのテーマにふさわしい、「社会生活移行に向けての具体的支援(事例)」を、①個別化 ②セーフティネット ③中間施設の役割 ④法人機能をはじめとした社会資源の活用などの切り口から論じた。

以下、発表の内容の要約を記す。

〈論題〉「法人体系と個別支援」―救護施設から社会生活移行までの事例を通して―
〔事例〕約八年前、やしおみ荘に知的障がいをもつ二十歳の男性利用者が入所した。平均年齢六十歳を超える施設の中に、たった一人、二十歳の男性。周囲の利用者との文化もコミュニケーションも全く異なる中で、彼に対する支援をどう個別化し、本人の望む社会復帰に結びつけるかが大きな課題となった。

八年を経過した後、彼は希望通り社会生活移行を果たし、アパートで単身生活を送

ることとなったが、その間支援の舞台は、

救護施設やしおみ荘↓知的障害者更生施設ふじみ更生園↓知的障害者通勤寮レジデンスなこそ↓社会生活移行というプロセスをたどり(つまり法人のもつ機能を有効に活用し)、尚且つ多くの社会資源の協力を得ている。

次に具体的支援について紹介したい。まずはやしおみ荘の支援から:

救護施設

やしおみ荘の支援(約三年間)

●入所理由:どこにも行ける場所がないので救護施設にきた(救護施設のセーフティネットの役割)

●最終支援目標:社会生活移行(救護施設の中間施設としての役割)

●支援の前提:エンパワーメントと弱点的克服

●本人のもてる力を整理し引き出し、生活を活性化させるプロセスの中で弱点(社会生活移行に向けて不足している部分)を克服する。

●本人の力:活性化に生かす部分

①社会生活移行のモチベーションが高い

②年齢と感性が若い ③体力的に比較的優れている ④スポーツを好み得意とする

⑤性格的に人懐こく憎めない印象を与える ⑥金銭の大切さを知っている

不足する部分:社会生活移行に向けて克服する部分

①ライフサイクルの不徹底 ②作業などの集中力、持久力に欠ける ③服薬の意識に欠ける ④調理の経験に乏しい ⑤金銭管理の力に欠ける ⑥不適切な対人関係

具体的支援

●具体的支援

●生活移行の視点:スポーツ大会出場を目標に近隣を走ることで、内面的な昇華を図る。結果、全国大会出場を果たす。又、

知的障害者更生施設ふじみ更生園の音楽バンドに参加し、ドラマーとして活躍。弱点克服の視点:日課の中でライフサイクルや金銭管理能力、対人関係等の向上を図り、近隣のスーパールの協力などで、仕事に対する集中力、持久力を高めた。

知的障害者更生施設

●ふじみ更生園の支援(約三年間)

●支援の前提:より社会生活に近い支援

具体的支援

●生活訓練棟の活用:一戸建ての別棟での生活で、より自立に近いイメージをつかんだ。

●就労:就労先を確保し、ジョブコーチが入り、本人が職場で働く上でのコーディネートをした。

●職場の理解:「本人が仕事に合わせる」という発想ではなく、「本人が集中して働ける環境はどのようなか」を追求してきていた。

※就労先を確保し、職場の協力を得られたことは、本人の人生にとって極めてポジティブな出来事と判断される。

知的障害者通勤寮

●レジデンスなこそ(二年間)

●支援の前提:さらに社会生活移行を強く目標とし、二年後には現実の社会生活移行に至ることが前提。

●具体的支援と結果:①ライフサイクルについては、例えば朝の役割を持つことで、その責任感から早起きできるようになった。②ストレス耐性:職員の仕事訪問と職場の協力体制により、早退が減少した。③服薬は管理方法を工夫する事で、楽しんで実施。④調理はレトルト食品の活用でレパートリーを増やした。⑤通院は、自分の症状を伝えるトレーニングをし、説明できるようにになった。⑥金銭管理は、カード使用のシミュレーションを実施し、使えるようになった。

アパート生活

●住居:会社まで自転車ですぐの距離。

●食事は朝はパン、昼食は社員食堂、夕食は調理するが、疲労もあり今後の継続が課題。

●経済観念:すべてが自分の出費という意識が強く、節電に努めるなど、良好な対応ができています。

※ヘルパー使用も検討し、認定調査を実施したが非該当。本人は逆に喜んでいる。

●アフターフォロー

●法人の施設にはいつでも遊びに来れるような声かけ。

●月に一回の定期訪問。また、男性職員が遊びを装い訪問。

〈総括〉

今回の事例を通して言えることは、やはり施設があっても利用者があるのではなく、利用者があって施設がある、ということ。集団として安定していればよいというのは決してない。

施設というのは「集団生活」の名のもとに、それだけで「個別支援」を阻害する要素が多い。だからこそ「個別支援」に取り組み意識が重要と感ずる。

しかし、救護施設の枠内のみでは、本当の個別支援の追求は困難。ということは、いかに社会資源を活用し、点から線、線から面へと広げて行けるかという発想が重要。今後も試行錯誤し、個別支援に取り組んでいかなければならない。

●発表の概要は以上

さて、今回発表の機会を得ることができ、自己啓発の意味で大変ありがたく感謝すると同時に、先に述べたように、救護施設がもつセーフティネット性と中間施設としての役割、更に個別支援とそれを支える社会資源の必要性という重要なポイントを示すことができたかと思っております。特に今回の事例のように「社会生活移行」のニーズがある場合、法人のもつ機能と社会資源を適切に組み合わせる支援していく必要がある。

今回の事例の発表については、第一分科会助言者の方からも肯定的な感想を頂戴することが出来たが、救護施設の機能が多岐にわたって要求される今日、少しでも利用者の個別のニーズに応え、成果を集積し、次のより良い支援へと生かしていく必要がある。